

D. H. ロレンス

E. M. フォースター 著¹⁾

関 口 正 和 訳

最近の談話のなかで、デズモンド・マッカーシー氏²⁾は、ロレンスは難解な作家であると語っている。それは当を得た論評なので、わたしは自分ではなくて、マッカーシー氏が、いまロレンスについて語っているのならば幸いだと思うのである。かれほどの鋭敏な洞察力と慎重な判断力それに魅力的な話しぶりをもってすれば、読者のロレンス理解には役立つであろうし、またかれの影響で読者はロレンスを読みたい気持ちにもなるであろう。作品を読まなければ作家を理解することはできないのである。こんなことは明白で、いやというほど思い知らされることなのだが、そのくせ、往々にして看過されてしまうのだ。それに作家が心から望んでいることは、作品を読んでもらうことである。いまのところロレンスはじゅうぶんに読まれてはいない。あるいはまともに読まれているともいえない。ロレンスには二通りの読者がいるのだが、かれらはいずれも満足な読み方をしていない。一方には、ロレンスをみだらな作家とみなしてかれの作品をほとんど読まない普通の読者がおり、もう一方には、かれの作品を

読むことは読むのだが、近視的で狂信的な読み方をし、ロレンスを人間性と人間社会を変革するために現れた一種の現人神とみなす独特の読者がいる。かれ自身の読者——正確な理解を示してくれる読者——にかれはまだほとんど恵まれていないのである。そういうわけで、わたしがこういうことをいうのも、なんとかしてあなた方にロレンスのよき理解者の一人になってほしいとおもうからである。わたしは自分ではロレンスをわれらの時代の偉大な作家の一人と考えている。だがどういえばこの意見を読者にわかってもらえるだろうか。つくづく自分がマッカーシー氏であればよいのと思う。

ロレンスは労働者階級の人であった。かれはノッティンガムシャーとダービーシャーの州境にある炭坑夫の家で育った。それでかれはその地方とそこでの生活を、かれの二つの初期の小説『白孔雀』³⁾及び『息子と恋人』⁴⁾とかれの戯曲『後家になったホルロイドのおかみさん』⁵⁾のなかで描いているのである。かれは自分では炭坑で働いたことは一度もなく、もっぱら教師になるための教育をうけた⁶⁾——おそらくかれの

1) Edward Morgan Forster (1879-1970) 英国の小説家。Cambridge 卒業。わずか5篇の長編小説と、10数篇の短篇小説を著わしているにすぎないが、現代的テーマを早くから扱った先駆者として、いまなお、多くの影響を与えている。方法的には、Austen, Meredith, Henry James などの流れをくむ社会風俗喜劇の形をとる。中産、上流階級の人々を中心とした人間関係の問題を追求し、同時にその限界・虚偽を克服するものとして、生命主義への志向を示している。代表作に *A Passage to India* (1924) があり、小説論 *Aspects of the Novel* (1927)、評論集 *Two Cheers for Democracy* (1951) その他エッセイにも注目すべきものが多い。

なお、本稿にとりあげたD. H. ロレンス論は、1930年4月発行の *The Listener* に掲載されたものである。

2) Sir Desmond MacCarthy (1878-1952) 英国のジャーナリスト兼批評家。Eton および Cambridge を卒業後、*New Quarterly* をふりだしに、多くの雑誌の編集を手がけ、一方では *New Statesman*, *Sunday Times* などに劇評や文芸評論を寄稿し、その鋭い批評眼によって、独自の見解を示した。一番長く重要な役割りを演じたのは、穏健な文芸雑誌 *Life and Letters* (1928-39) である。

3) *The White Peacock* 最初の長編小説。1911年出版。

4) *Sons and Lovers* ロレンスの代表作の一つで、三番目の長編小説。20世紀英文学の古典とされている。1913年出版。

5) *The Widowing of Mrs. Holroyd*. 三幕物の戯曲。1914年出版。

6) ロレンスは奨学金でノッティンガムの高校を出、17歳の時生地の小学校で教生として働き、翌年イルキストンの教員養成所に入る。19歳で無免許教員のための王室奨学金試験にイングランドおよびウェールズの首席で合格する。1905年(20歳)6月、ロンドン大学入学試験に合格するが、進学資金を調達できなかったため、1年間ブリティッシュ・スクールに勤めたのち、翌1906年(21歳)9月、ノッティンガム大学師範部に入学、2カ年の課程を終えて同大学を卒業している。

父親は7歳の頃から炭坑で働き、数名の坑夫長で生涯を終えた。酒と歌が好きで、文盲同然の無教養な人だった。一方、母親は信仰を持ち、標準英語で話し、読書家であった。ロレンスは5人兄弟(兄2人、姉1人、妹1人)の4番目で、かれが教育をうけられたのは、この母親の力に負うところが少くない。

母からうけた影響によるものと思われる。かれは母に深い愛情を抱いていた。母は立派な性格と卓越した知性の持主だったので、その死はかれにとってはもっとも耐えがたいものであった。

しばらくかれはロンドン郊外にある小学校の教諭をしていた⁷⁾——けだしこの経験からかれの教育不信とそのやりきれなさを語るあの説教調がでてくるのであろう。やがてかれは文学に関心をよせる。わたしがかれに三、四回会ったのはその当時つまり1915年の春であった。わたしはかれをよく知っていたわけではなかったし、またその後ひきつづいてかれと再会したわけでもない。それでもかれは指先がとても器用で、生氣発らつとしており、とても晴れやかで感じやすく、自信にあふれていたのも、もしわれわれが皆南洋諸島のどこかの島にすぐ出かけるならば、この世界を刷新するような完全な社会がそこに見られるのではないかと思わせられるような強烈な印象をのこしている。シェリー⁸⁾にも若干そういうところがあったにちがいない。だが、ロレンスはシェリーよりもずっときめのあらい手ごわい相手なのである。かれには冷酷なところがある。それにかれは社会に逆らって実際に羽ばたいたことがあり、その努力は水泡に帰したものの、それはかれが天使ではなく猛禽として力不足だったということなのである。かれはいずれの南洋の島にも行かなかった。

戦争は激しくなっていく。かれの健康はその頃にはかなり悪化していたので、兵役は免除されたのだが、恐ろしい想像から逃れることはできなかった。かれはひどく苦しんだ。そのうえかれが熱愛していた妻⁹⁾は

7) ロレンスはノッティンガム大学を卒業(23歳)した年の10月12日に、ロンドン郊外クロイドンのデイヴィッドソン通り小学校の教諭となっている。

8) Percy Bysshe Shelley (1792-1822) 英国の抒情詩人。Queen Mab, a Philosophical Poem (1813), The Revolt of Islam (1818), Prince Athanase (1824) その他数多くの詩をとおして社会改造の要求をし、理想社会の建設を主張している。

9) ロレンスの妻フリーダは、ノッティンガム大学の教授でロレンスの恩師でもある著名な言語学者アーネスト・ウィークリーの妻であった。彼女の父は、普仏戦争の後、ドイツのアルサスローレン知事を勤めたリヒトホルフェン男爵で、彼女はその環境から、貴族的な自由と強烈な氣風を濃厚にもっていたようである。

彼女はロレンスより4歳上で、すでに3人の子(1男2女)の母で、末の女の子はまだ3歳であったが、かれのもとに走る。彼女31歳であった。世界大戦が勃発してからは、フリーダはドイツ人であるがために、散歩中さえ官憲の監視の目をのがれることはできなかった。1917年10月2日、警官に家宅を搜索され、スパイ疑いの

ドイツ人だったので、かれらは国内にばかりいる愛国者たちから迫害され、各地を転々と追われつづけた。かれは『カンガルー』¹⁰⁾のなかでこれについて詳しく述べている。それに、戦争ものがはやっていることでもあるし、おそらくこの文章は再読されるであろう。それはわたしがいままでに読んだ非戦闘員の状況についての、もっとも胸の張り裂けるような物語である。かれはついに英国から脱出し、二度と故国に定住することはなかった。かれの初期の作品を崇拜し、しかも非常にあたまのさがることには、自分の善行をほとんど意識しない人の適切な勧告にしたがって、残りの生涯をかれはドイツ、イタリー、オーストラリア、メキシコなどの国々につぎからつぎへと移り住んで過ごした。かれの後期の作品はあまりいただけない。それにたしかにかれはかなり型にはまったものや教訓的なものを書くようになる。しかしかれの本質的な特質——黙想しひらめく詩情、読者に対象の色彩と重みを伝える力量——こうしたすべてのものは健在である。じじつわたしの考えではかれのもっともすばらしい小説は後期の作品——『翼ある蛇』¹¹⁾——なのだ。そして晩年にはかれはだめになってしまったと誤解している人でも、その小説を読めば納得するだろう。かれは南フランスで二カ月前になくなった。

ロレンスは自分ではわれわれの本能の命ずるままに生きよというわれらへの予言をたづさえた指導者であると思っていた。その予言が正しいのかどうかわたしにはわからない。それはたしかに目新しいものではない。だがかれは一方では詩人なのだ。わたしが理解しにくいと思っているのはこの指導者と詩人との関連なのである。わたしはこの二つは切りはなしえないものだと思う。それに、もしかれが予言すべきものをもっていなかったら、かれの詩は展開していなかったであろう。かれの想像力をいきいきと働かせたものはかれの哲学であったわけだから、厳密に言えば文学の本筋からはずれているといつてかれを責めてもあまり意味がない。かれの作品の多くは退屈であり、またある作品のごときは人々に衝撃を与えるものだから、われわれはついこんなことをいいたくってしまうのだ……「じじに残念だ! 男や女についてかなりいいじらし

く、かどでコーンウォールからの退去、沿岸地方における居住の禁止、動静の定期的な報告、などを命じられた。

10) Kangaroo ロレンスが1922年にオーストラリアに滞在したときに書いた長編小説。翌年出版された。

11) The Plumed Serpent 1926年に出版された長編小説で、メキシコを舞台にして書かれたもの。

く書くことができ、また花々などをとても美しく描けるのに、潜在意識だとか、太陽神経叢、男らしさ、女らしさ、アフリカの暗黒、それに宇宙のかぶと虫などのことばかり書きつづけるとは、じつに残念だ」と。しかしわれわれはかれの奇妙な体質のなかでは、要件が関連づけられていたのであり、もしかれが説教もせず予言もしなかったら、かれは見ることも感じることもできなかったのだということを了解しなければならぬ。われわれは——ときにはそう思いにくいこともあるのだが——かれをかえることはできないのだということを理解しなければいけない。たとえばすさまじい異議をひきおこすかれの性の論じ方という問題がある。わたしはここではそれについて語るつもりはない。ここはそれを論じる場ではないのだ。しかしそれは実はわたしが話そうとしている事柄と関連しているのである。それに、その問題は関連がないようなふりをするのはかれの霊をはずかしめることになるだろう。かれはむら気の人ではあるけれど——読者にはつぎに何があらわれるのかまづわからない——かれのなかでは雑多な要素がとけあっているのだ。「かれの理論の方は捨ててしまっ、て、芸術を享受しようではないか」というわけにはいかない。この二つは一体となっているものだからである。かれの理論を信じないというならそういってもよいが、それらを無視してはならない。それにかれが読者をしかることがあっても、かれをしかってはならない。かれはおおむねたいの作家たちよりもはるかに自然の経過に似ているのだ。かれは説教本能と同様に本能的に書くのである。したがってかれをしかるのは堆肥のおかげで育ったからといって花をしかったり、花を生みだしたからといって堆肥をしかるようなものだ。

ロレンスが文明を嫌うのは多くの作家とはちがって、見せかけではない。かれは文明を根源的に憎悪した。文明は人間を意識的にし、社会を機械的にしてしまったからである。ブレイク¹²⁾だとかそのほかの神秘論者と同じく、かれは不毛な理性の鎖につながれ、知識の重荷を負っている知性を非難する。かれは自己犠牲や愛も憎いのだ。かれは何に賛成するのであろうか。ところで、この「賛成する」ということばそのものをきくと、かれはおこって非難するだろう。このことばはとてもなめらかでおつにすましているのだ。こんなものではなくて、かれはきっとかれがつねづねいい

るあの忘れられた知恵を捜し求めているのである。かれは本能に再生してもらい、現代ではすたれてしまったさまざまな方法で人々を結びつけて欲しいと願っているであろう。かれの考えによれば人類は間違っ曲り角を曲ってしまったのである。つぎつぎに著わす作品のなかで、かれはこのことをくりかえし主張している。そしてそこから多くのはなばなしい詩の火花を打ちだし、しまいにはかれの精神構造のすべてがめらめらと燃えあがり、われわれは何頁にも何章にも及ぶすばらしい詩を味読できるというわけである。かれは本当に個人を信じているのだ——かれの神秘主義は仏陀の、虚無的な種類のものではない——また、非論理的にきこえるかもしれないが、かれはやさしさというものを信じているのである。この点に関してはかれの母の思い出が重きをなしていると思う。母の思い出にはいかなる理論をもはねつけてしまい、母が亡くなったときには係わりのある諸々のことがらを美化してしまふ愛すべきものがあつた。やさしさはかれの太陽神経叢¹³⁾やかれの血の証しの蛭行¹⁴⁾などという擬似科学通語の背後にひそんでいる。やさしさはかれが破壊してしまいたいと思っている文明にたいする譲歩であり、かれが再興しようとした原始的な神話にみられる弱点をうめあわせるための譲歩なのである。それは夜明けと日没の二つの道の主である明けの明星¹⁵⁾なのだ。

わたしがいままでに述べてきたことから、ロレンスの小説が変ったものにならざるを得ないのは明らかである。われわれはたいのい小説にはまず登場する人物が、いきいきしていること、第二にはある種の統一を求める。そこで、かりにわれわれがこの尺度のいずれかをかれの小説にあてはめてみると、規格はずれになってしまうのだ。初期の小説では、登場人物のある者は、ロレンスがのちに描いたものよりも自分の環境について詳しく描いているために、いきいきしている。『白孔雀』に出てくるジョージ・サクストン¹⁶⁾は、ロレンスが知り合いの若い農夫¹⁷⁾をモデルにしたものであ

13) the solar plexus 太陽神経叢は胃の背後にある神経中枢である。ロレンスによれば、ここに人間の根元意識のひとつがあるという。『精神分析と無意識』(Psychoanalysis and Unconscious)ではじめて提起され、つづいて『無意識の幻想曲』(Phantasia of the Unconscious)において敷衍された。

14) 『恋する女たち』の第16章に出てくる。昔のドイツの騎士のあいだに行なわれた誓いの形式で、互いの腕に傷をつけ、その傷口から互いの血をこすりこむこと。

15) The Morning Star『翼ある蛇』に出てくる。

16) George Saxton The White Peacock の主要登場人物の一人。

12) William Blake (1757-1827) 英国の詩人、画家、神秘思想家。

り、『息子と恋人』に登場する母は、ロレンス自身の母なのである。かれは一生涯才気のある意地悪な小さなスケッチを書くことができた。「ジミーと無茶な女」¹⁸⁾と題する短篇小説にはその一例がみられる。だがかれは本当に作中人物を創造できる人ではなかった。かれはかなりいらだちやすく理論好きだったので作中人物を創造できなかったのだ。かれの小説に登場する人物は何かを説明しなければならない。かれは作中人物には勝手に行動させないし、また英国小説の著しい特徴である公平無私でユーモラスなわき演技などもさせない。かれは自分が大まじめなものだから、作中人物も同じように振舞わなければならないというわけだ。だからこのようないくつかの制約があるにもかかわらず、作中人物がわざとらしくなくておもしろいというのは妙なことだ。かれらは生きてはいないのだが、なまなましい要素にあふれている。『恋する女たち』¹⁹⁾の奇妙な4人²⁰⁾——あのような若い男女に逢ったことがあるだろうか。しかもかれらのなかの一人は文部省につとめていることになっている。さまざまな議論やめざましい経験が続出することはするのだが、それでもかれらは読者に語りつづけてはいないだろうか。読者はかれらを飾り人形ときめつけることはできないし、またかれらをやせこけた人のいる谷間に捨てることもできない。それからさきに示唆した第二の評価基準——つまり芸術的統一という評価基準をあてはめると、同じような疑問に悩まされるだろう。筋書きはよくできておらず、小説は美的統一体をなしていない。それにもかかわらず、しめくくりでは満たされた気持になるのである。またもや生きているという気持にふとおそわれ、詩が構成にとってかわる。わたしはさきにロレンスを鳥になぞらえたので、かれの小説を読むと、とまり木がどこにでもつながっていて、これというわけもないのに飛びはじめたりとまったりして、一連の短い絶妙な飛び方をする小鳥のあとを追っているような気がするのである。

それでもある小説は普通の小説構造の評価基準に合格して生きのこる。『翼ある蛇』がそれである。それは一見したところでは、盛装してメキシコの古代の神神がこの世に再臨したとふれこむ3人の人物についてのとほうもない小説である。しかしそれはみごとに組

みたてられ、雰囲気は物語がすすむにつれて緊迫してゆき、両者はその極に達する。われわれはまずメキシコシティの汚なさを見すばらしさに出くわす。そういうものがこの国全体を象徴しているようだ。それから何かそのほかのものについての暗示、奥地の清んだ湖についての暗示が示される。さらにその湖の背後では、恐ろしくもすばらしい雷雲の上方に、再来の宗教を想わせるものが立ちのぼる。緊張が強まるにつれて、賛歌が導入され——ロレンスの無韻詩のなかでは、もっとも素晴らしいものである——そしてこうしなければ怪奇なものになってまうのではないと思われるほど情緒的にこの物語をまとめている。再来の神々はキリスト教について話を交える。キリストや処女マリアや聖人たちの肖像はうやうやしく村の教会からもちだされる。神々は挫折し、疲れ果て、かれらの愛の王国は実現せず、かれらは休まなければならなくなる。清んだ湖はかれらを受け入れ、かれらは炎につつまれて平穏の境地に達する。そしてメキシコの古代の神々がかれらにふさわしい場所にある教会に納まり、人々の崇拜をうける。そのあとでこの小説はややばく然とした幕切れになるが、全般的効果はじつに見事なもので、われわれは偉大にして神秘的な儀式に臨席する思いがし、あたりのメキシコの風景までいきいきしてくるような気になるのである。

かれの詩²¹⁾を一つ引用して終りとしよう。その詩を読んでもらえば、わたしがいままで指摘してきた問題点のある部分がつかめるだろう。それはかれの母の死についての初期の詩で、かれが有名になり、母に榮譽を与えられる日——おそらくさほど遠くない日であろうが——を心待ちに待つ心情をうたっている。

その日

わたしはばらをいくつも積み重ねて
あなたのお墓をたくさんの白ばらと
そしてあなたはつよい人だったから
一条のあざやかな赤い光りで
包みましょう

そうすると人々は 谷間の道の
とねりこの木の下を通るとき
目をあげて 丘のうえのお墓を
おどろいたように眺め

17) Alan Chambers のこと。

18) *Jimmy and the Desperate Woman* 1924年出版。

19) *Women in Love* 1916年11月に脱稿し、1920年に出版された長編小説。

20) この小説に登場する4人の主要人物のこと。

21) *Rhyming Poems* (押韻詩集、1928年出版) に集録されているロレンスの初期の詩で、*On That Day* のこと。

けげんな顔で丘をのぼり
ばらの花を散らかしてしまおうでしょう
だれの賞賛がこんなにも白く
こんなにもどぎつく赤く
ここにかざられているのかを見るために
そしてかれらはいうことでしょう
「彼女が亡くなってもうかなりたった
何日もたったのに 彼女を覚えているのはだれ
でしょう」と

それから そこに立ちつくし
かれらは思いめぐらすことでしょう

あなたがかれらのあいだを通り
顧みられずに 信じる道を歩んだことを
この俗事の迷路に迷いこんでしまった
やさしい女王であったことを

かれらはいうことでしょう 女王は
忘れられた丘のうえで だれにも気づかれずに眠
っていると
あなたはそこでだれにも知られず
気づかれず 眠りつつけるのです
わたしの反乱の日の夜が明けるまで